

# あびこの文化

発行人 大洋 美崎  
我孫子市 高野山  
250-2123  
04(7182)  
0861

## 令和三年度総会

今年度の総会是我孫子市が「まん延防止等重点措置」を実施する区域に追加指定された(六月二十一日に解除)ことを踏まえ、昨年に続き新型コロナウイルス感染症防止のため一堂に会しての総会は開かず会員宛て書面による通達にて行います。

議案書の主な内容については以下の通りです。(詳細は同封の議案書を「ご覧ください」)

### 第1号議案 令和2年度事業報告

#### 1. 嘉納治五郎銅像建立プロジェクトの推進とフォロー

4月15日に嘉納治五郎別荘跡(天神山緑地)に予定通り銅像を建立することが出来た。

#### 2. 「40周年記念誌」作成の企画と推進

会員を始め周辺の関係者の協力で推進、納本は新年度となったが、ほぼ予定通りに実現した。

#### 3. 総会、文化講演会の開催

新型コロナウイルスの影響により、総会、文化講演会は中止とした。

#### 4. 史跡文学散歩の実施

2回実施した(新型コロナウイルス感染拡大の中、感染防止に努め実施)。

#### 5. 放談くらの開催

3回開催した(新型コロナウイルス感染拡大のため3回は中止)。

#### 6. 文学広場掲示板への短歌六首掲示(年3回)

手賀沼沿いの若松地区「文学の広場」掲示板に年3回、6首を1ヶ月間掲示した。

#### 7. 「美しい手賀沼を愛する市民連合会」への参加

10月10日(土)手賀沼流域フォーラム実行委員会として「川巡りと木下の史跡散歩」は、雨天のため中止した。

#### 8. 文化活動関係団体との連携協力

「市民のチカラまつり2020」は新型コロナウイルスによって、暮らしや社会の仕組みが大きく変わりつつある今回、9月27日(日)オンラインを中心に開催した。

#### 9. プロジェクト活動への全員参加を進める

新型コロナウイルス感染拡大の中「短歌の会」のみ年間を通して隔月に継続して実施した。

#### 10. 白樺派についての継続的研究・勉強

白樺派、我孫子の文士村の契機となった「嘉納治五郎」についても引き続き研究が進んだ。

#### 11. 「我孫子市生涯学習出前講座」の推進

当会が担当する講座については関心も高く、また参加者からの評価も大変良かった。

#### 第2号議案 令和2年度決算及び監査報告

決算内容につき、芦崎敬己、飯高美和子監査役から「適正に処理されている」との監査報告があった。

#### 第3号議案 役員選任

(会長)美崎 大洋(副会長)村上 智雅子、(幹事)伊藤 一男、戸田 七支、斉藤 清一、佐藤 やす子(会計)、牧田 宏恭

(監査)飯高 美和子、芦崎 敬己

#### 第4号議案 令和3年度事業計画

1. 「40周年記念誌」のPR売支援

#### 2. 会員数の増強(目標、年度末1000名)

3. 地域の歴史の掘り起こしと、郷土の文化の維持・創生

#### 4. 史跡文学散歩の実施(年4〜5回予定)

5. 放談くらの開催(原則、偶数月第1日曜日午後2時〜)

#### 6. 文学の広場掲示板への短歌6首掲示(年3回)

7. 「美しい手賀沼を愛する市民連合会」への参加

#### 8. 文化活動関係団体との連携協力

9. プロジェクト活動の活性化

#### 10. 白樺派についての継続的研究・勉強

11. 我孫子市生涯学習出前講座の推進

#### 第5号議案 令和3年度予算

同封別紙予算案の通り

(略儀ではありますが、「議案書」に「意見」、「提案あれば、7月15日までに美崎までお申し出ください。)

#### ・読売新聞が『四十年史』の論文で取材

『我孫子の文化四十年の歩み』に収載した平林キヨエさん(会員)の論文「手賀沼畔居の画家・歌人原田和周(聚文)」と、彼が招いた歌人たち(窪田空穂・染谷進・宇都野研・割田斧二・宇野某・大正十四年〜昭和二年)が読売新聞社記者の目にとまり、読売新聞社から平林さんに取材があり、原田京平についての記事が同紙6月27日(日曜版「よみほつこ」)に掲載された。

紙面の約半分弱の大きさで原田京平が描いた風景画「六ヶの道と手賀沼」がカラー刷りで載っている。解説の文章に先行する中央の見出しには「発見された「白樺」の記憶」とある。原田京平と京平に纏わる数人の歌人を題材にした長文の論文に対し、掲載記事は原田京平にのみフォーカスを当てて書かれている。

「……(原田)京平は永く忘れられていた洋画家だった。「発見」のきっかけは2009年11月、京平の次女で米ニューヨーク在住の洋画家・原田南さんが同市(我孫子)の白樺文学館を訪ねたことだ。(中略)大正時代、我孫子は白樺派の拠点だった。同人雑誌「白樺」のメンバーである柳宗悦、武者小路実篤、志賀直哉らが、手賀沼沿いに集まって暮らした。京平は1921年に移り住み、志賀と親しく交流する。23年に志賀が京都へ引越すと、その留守宅に一家で移り住んだほどだ。南さんは、このとき生まれた……」

雲母なす朝霧こめて手賀沼は眠れるままに船渡すかも

歌人でもあった京平の代表作と平林さんが論文で評した歌も掲載記事ではそのまま紹介している。

なお平林さんは嘉納治五郎銅像建立プロジェクトがスタートした際、治五郎の曾孫さんを我が会に紹介してくれ、プロジェクト成功に大きな貢献があったことを改めて記します。



足の下に邪鬼天の邪鬼を踏みつけているお姿である。

＊⑥(護国院)大黒天

インドのヒンドゥー教のシヴァ神の化身マハーカールラ神。日本古来の大國主命の習合。大黒柱と現されるように食物・財福を司る神となった。大きな袋を背負い、打出小槌をもち、頭巾をかぶられたお姿である。

＊⑦(寛永寺弁天堂)弁財天

七福神の中の紅一点で元はインドのヒンドゥー教の女神であるサラスヴァティー神。仏教に取り入れられ、音楽・弁才・財福・知恵の徳のある天女となり選ばれた。七福神の「柱」としては「弁財天」と表記されることが多い。

弁天堂の本尊は、八臂大弁財天。長寿、福得の神として広く信仰を集め、音曲の神としても有名である。弁天様は琵琶を奏でている姿が頭に浮かぶが、不忍池弁財天は八本の腕に剣や弓などを握った完全武装のお姿で、『八



臂弁財天』という形態である。琵琶を持つ弁天様より弁天堂の八臂大弁財天のお姿の方が、日本においては歴史が古いそう。

七福神の見廻りにつれ、各各の福の神様に丁寧に僅かばかりのお賽銭を挙げ、今年は昨年より、より良い年でありますように心より願う「敬天愛人」さんでありました。

＊駅伝の碑：駅伝の歴史ここに始まる『我が国』最初の駅伝は、寛政20周年記念大博覧会「東海道駅伝徒歩競走」が大正六(1917)年4月27日、28日、29日の三日間にわたり開催された。スタートは京都・三条大橋ゴールは、東京・上野不忍池の博覧会正面玄関であった。』

2016年1月14日(木)ブログ

『下総松戸七福神』の見廻り

前日は何んとも冷え込みが激しく、鼻水までも氷りつくかと思える冬日であったが、正月十三日(水)は汗ばむほどの穏やかな晴天に恵まれた。この日、元山仲間のジジババ16名は下総松戸の七福神の神々に、健康なる足腰を賜っている感謝の気持ちに飽き足らず、強欲にもさらなる福徳を求めて見廻り参拝に出かけた。

この日の見廻り行程：

- 我孫子駅 8:45 集合 → 新松戸駅 → 武蔵野線新八柱駅
- ↓ ①円能寺 ↓ ②徳蔵院 ↓ 八柱駅(新京成) → 松戸駅
- 京成バス(松31系) → ③宝蔵院 → 京成バス → 春雨橋 ↓
- ④善照寺 → 昼食 35分間 ↓ 松戸駅京成バス(松71・73) → 主水 ↓ ⑤金蔵院 ↓ 京成バス停主水 → 武蔵野線
- 南流山駅 → 新松戸駅 ↓ 幸谷駅(流山電鉄) → 小金城
- 址駅 ↓ ⑥医王寺 ↓ ⑦華厳寺 ↓ 北小金駅 → 我孫子駅 15:00

移動時間：約5時間 10分(内歩行時間2時間20分)、

見学時間：35分、休憩時間：35分  
歩行数：約23,000歩

松戸七福神は「真言宗豊山派七ヶ寺」による、福徳と心の安らぎを大切にしたい七福神と云われている。七福神の信仰は室町時代の末期のころより生じ、当時の庶民性に合致して民間信仰の最も完全な形となつて育てられてきた。特に農民、漁民の信仰として成長し、現代に生き続けてきた信仰である。

七福神のうち、大黒天、毘沙門天、弁財天はインドの神様、寿老人、福祿寿は中国の道教、神仙観より、恵比須神は日本神道の出身とされている。唯一、布袋和尚は唐末五代の実在の禅僧である。

＊①福祿寿・円能寺(御本尊：阿弥陀如来) 松戸市千駄堀 735

長い頭がトレードマークの福祿寿(ふくろくじゅ)は、福は幸福、祿は富、寿は長寿を表しているという、この上ないメデタイ神さま

＊②寿老人・徳蔵院(御本尊：慈母観音菩薩) 松戸市日暮 5-270

寿老人(じゅろうじん)はその名のとおり長寿の神様で老子の化身の神さまという説も。安心して長生きできるようお願いしてみたい。

＊③大黒天・宝蔵院(御本尊：大日如来) 松戸市上矢切 1197

右手に袋、左手に打ち出の小づちを持った大黒(だいきく)さまはあまりにも有名。商売繁盛の神さまとして、商売を営む方のファンが多い。



\*④ 布袋尊：善照寺(御本尊)：聖観世音菩薩) 松戸市松戸 1857  
 大きなおなかとふくよかなお顔が印象的な布袋(ぼてい)さまは、いつも大きな袋をかついで出かけた。唯一実存した人物で、名を契此(かいし)という高僧。

\*⑤ 恵比須神：金蔵院(御本尊)：飯縄不動尊) 松戸市旭町 2-4192  
 いもこニコ、まさにエビス顔の恵比須(えびす)さまは、大黒さまと並んで商売繁盛の神さま。お願いすれば景気回復も夢じゃない。

\*⑥ 毘沙門天：医王寺(御本尊)：不動明王) 松戸市中金杉 4-1894  
 よろいかぶとに身をまとった毘沙門天(びしゃもんてん)。こわ面の顔とは裏腹に心の迷いや悪行を撤退させ、財宝を授けてくれるヒーロー的存在。

\*⑦ 弁財天：華厳寺(御本尊)：地藏菩薩) 松戸市幸田 1-129  
 七福神の中の紅一点弁天(べんてん)さまは本来水の神だが、学問と芸術



の神、さらには富財の神としても活躍。七人の中で最も多忙な神さま。



### 柳宗悦を支えた兼子(その1)

大井 正義

(註、文中( ) 数字は参考文献、文末参照) 私文集『我孫子の文化四十年の歩み』『嘉納治五郎銅像建立記念特集』に、『嘉納治五郎の銅像に想いを馳せて』を投稿しました。同文では嘉納治五郎が手賀沼畔に学園開校構想を決めたことを、柳宗悦の美しい文『我孫子から 通信一』を引用して述べました。  
 (1) 柳は『柳宗悦全集』三冊に書簡集が出版されたように、生涯に4700通余の手紙を差し出したので、この通数からも柳は生涯真摯に生き、多くの人に気配りしていたことがわかります。この柳の姿と書簡のなかで兼子に宛てた手紙の文面から、兼子を想う気持ちがわかります。

兼子も訪ねてきた柳が、行きつ戻りつしている姿を見たときは、庭の花をとって渡しているので兼子の気持ちもわかります。(2) この二人が結婚したので、柳は兼子と結婚できた至福の想いを前述の文で表現したと想像し、記念特集書『私のロマン』として執筆しました。しかし、投稿文は柳の視点から述べたので、本文では柳と兼子の視点で執筆しました。

一方、柳が『我孫子から 通信一』を執筆したのは、『ブレークの研究を終えた満足感で執筆した文である』と述べる説があります。(3) ブレークの研究は次のように大変な研究でしたので、そのような思いもあつたに違いありません。しかし、私は柳が結婚するまでの活動と、我孫子の人たちがみていた兼子の生活から、二人を新たな視点で考察しました。

柳が兼子と結婚した時代のヨーロッパはジャポニズムの時代でした。白樺派の同人たちは、写真で見たオーギュスト・ロダンの彫刻の素晴らしさに見入りました。すると彼等はロダンの70歳の誕生日にあわせ、雑誌『白樺』1910(明治四十二年)11月号にロダン特集号を組みました。柳はこの文を主に執筆し、この活動を熱心に進めました。

白樺派の同人たちはロダンの彫刻を日本に入れるべく、『白樺』のロダン特集号を、手紙を添えてロダンに送りました。手紙には浮世絵を後送する旨を記しました。その後柳は浮世絵を30枚送りました。するとロダンはその熱意にほだされて、半年後に彫刻をおくる旨の手紙を送ってきました。そのことを一日千秋の想いで待つっていると、ブロンズ像3点が送られてきました。1911(明治四十四)年12月のことでした。日本にロダンの作品が最初にやってきたのは、主として柳の活動によるものでした。(3)

次は柳の活動です。白樺派の同人たちはバーナー・ドリーチと出会うと、リーチからイギリスが生んだ最大のロマン主義詩人の一人であり、ロマン主義画家の一人であった、ウイリアム・ブレーク(1757-1827)を教えられました。すると柳は5年の歳月をかけてブレークを研究し、『白樺』に載せたのは1914(大正三年)4月号でした。(3)、(4)

この文は『柳宗悦全集第四巻』に、解説を含めて712ページの大書として発行されているので、5年の歳月を要した難行苦行の研究であったことがわかります。(5)

ブレークはロマン主義の先駆者といわれていますがイギリスでも、画家としても詩人としても、生前はかえ

りみられることはありませんでした。柳がブレイクを知った時代でも、美術史・文学史に格固たる位置を占めていませんでした。当時の英文学の教授たちもブレイクに顔をそむけていた時代でした。(6)。1894(明治二十七年)年に出版された大和田建樹『欧米名家詩集』には、ブレイクの詩が載っていました。1897(明治三十年)年に東京帝国大学でラフカディオ・ハーンが講義でとりあげ、和辻哲郎の論文がありました。ブレイクは注目されませんでした。(3)。イギリス留学をした夏目漱石は、『坊ちゃん』で数名の思想家を述べていますが、そのなかにブレイクを載せていたと記憶していません。

このような時代に、若年の柳が自力で難解なブレイクの思想をとくあかすことは、リーチの助力があつたとしても難行苦行であつたにちがひありません。それでも柳がブレイクの研究をすすめたのは、リーチの影響が大きかったからであると考えます。そのことは、柳は、リーチの特色は、ハーンとちがつて古い日本ともにも新しい日本を見る力をもつていた、といっていることとわかります。(6)。柳はこのようなブレイクについて本格的に研究したので、『我孫子から 通信一』は、この研究をやり遂げた満足感を表現したことは理解できます。そしてブレイクの思想は生涯柳に影響をあたえたこととわかります。

とはいえブレイクは今日でもあまり知られていませんが? 国立西洋美術館は1990年9月に「ウィリアム・ブレイク展」を開催したので、注目されている芸術家であることがわかります。私も同展を観望しましたが難解な絵画集でした。この文も同展の図録を見ながら考察していますが、約30年過ぎても難解であることは変わらぬままです。(7)

(以後柳と兼子の生活を述べる文は宗悦と述べてみます)。

宗悦のこれ等の活動を述べたのは、宗悦と兼子が結婚したのは1914(大正三年)2月であつたからです。宗悦がロダンの彫刻に奔走していた時期は、兼子と交際が始まっていた時期でした。ブレイクの研究文を「白樺」に載せたのは、結婚2カ月後のことでした。これ等

の活動から兼子は宗悦がどのような人で、これからのような人生をおくろうとしていたかは理解できたはずで。

宗悦は白樺派の作家として活動しましたが、同派の人たちは小説を書いたのと異なり、このような活動をしていたので、芸術論や民芸論をのべた氏の作品は、後に民芸をはじめとする様々な活動をおこなないながら、一家の生活ができるほど売れませんでした。

一方、兼子は帝国劇場にプリマドンナとして立っていたように、主演の活躍をしていた歌手でした。ドイツで唄つた時は、新聞は一面に大きく載せたので、彼女の活躍がわかります。(2)。兼子はこのような活躍をしていましたが、当時の常磐線は1時間に1本程度しか走つていなかったため、活動基盤は東京にいたことが好ましい生活でした。しかも宗悦の作品は売れなかつたので、生活は兼子の収入によるものでしたが、宗悦は風光明媚な静寂な手賀沼畔が、思考生活には好ましいと考へていたので、我孫子で生活しました。

兼子は東京生まれで1909(明治四十三年)に東京音楽学校に入学しました。当時の日本の音楽人口の中で、西洋音楽を解せる人の総数は千人と見積もられています。(6)。このことからわかるように、兼子は裕福な家庭で育ちました。しかるに当時の我孫子は、東京から移住してきた兼子にとっては、様々な事で極めて不便な町でした。(8)

今日は女性蔑視が社会問題になっています。『手賀沼と文人』を執筆した秋谷半七氏の取材から、我孫子の兼子の生活を次のように述べますが、妻としてのみ宗悦にしたがったものではありませんでした。彼女は宗悦と共に活動したこともあり、戦時中でも国防婦人会から、和服ではなくモンペに着替えなさい、と忠告されたが着替えませんでした。このように彼女は生涯自分の意志で生きたので、我孫子の生活も文化と芸術の理解者として述べます。(2)

「兼子は子どもが生まれると、おしめ等の洗濯は井戸からくみ上げた水で、たらいで、手で洗う生活で、子どもの育児をしながらの生活でした」と話してく

れました。

このような生活でも兼子が我孫子でその後も同じように生活したのは、宗悦の活動は日本の文化の発展に必要な活動である、と認識していたからであると考へます。宗悦はこのような活動が認められて文化勲章を授与され、高校の教科書にも記載されたように功績が称えられました。宗悦がこのように自分の描いた通りの活動ができたのは、兼子に支えられたことでした。(次号に続く)

参考文献

1. 柳宗悦『柳宗悦全集第一巻』筑摩書房発行 昭和五十六年
2. 松橋桂子『柳兼子伝』水曜社発行 1999年
3. 熊倉功夫『民芸の発見』角川書店発行 昭和五十二年
4. 出川直樹『民芸』新潮社発行 1988年
5. 柳宗悦『柳宗悦全集第四巻』筑摩書房発行 昭和五十六年
6. 鶴見俊輔『柳宗悦』平凡社発行 1976年
7. 国立西洋美術館『ウィリアム・ブレイク展』(1990年9月開催)図録 日本経済新聞社発行
8. 『朝日新聞』2020年5月23日(土)号『手賀沼の近く 芸術家が集う』

## 「我孫子の文化四十年の歩み」の発刊に寄せて

### 「我孫子の文化 四十年の歩み」

藤原 翠

この度は、我孫子の文化を守る会の四十年に亘る膨大な活動の軌跡を記した記念誌を発刊されたことを心よりお慶び申し上げます。特に、今回は嘉納治五郎銅像建立記念特集として皆様の熱い想いが籠った素晴らしい内容になっておりますことに、深い感銘を受けております。

景勝地手賀沼のほとりにある我孫子市は、古くから交通の要所であり、高い文化を築いてきた長い歴史があります。政治家であり文化人でもあられた嘉納治

五郎先生は、北の鎌倉と称せられる我孫子に別荘を構え、志賀直哉などの白樺派の多くの文人や芸術家を引き寄せられました。当会が嘉納治五郎先生の銅像建立という大きな目標を上げ、様々な苦難も乗り越えられ、後世に残る大きな文化遺産を残されたことには、深い敬意を表したいと思えます。

私は、中央学院大学の早川先生が講義しておられた我孫子の近代文学講座に籍をおいておりましたが、ここ数年は我孫子の文化を守る会より、主に村上先生と伊藤先生、そして二谷先生、美崎先生、越岡先生をお招きしてご講演頂いておりました。そんな「縁」で、遅まきながら当会に入会させて頂くことになりました。しかし、最近ではコロナ禍で本会の行事にも参加できませんでしたが、少しでも早く様々な行事が再開されますことを願っております。

私にとりまして、常磐線沿線で最も優れた風光明媚な文化都市である我孫子に住んでいることは、大きな誇りになっております。

### 「記念誌の発刊」を祝して

関口 和子

我孫子の文化を守る会の四十周年、そして嘉納治五郎銅像建立記念の時期に入会させて頂き光栄に思います。この度記念誌を拝見して、会員の皆様の「立派な文章の数々に接して、正直、場違いなところに飛び込んでしまった感」で少々たじろいでおります。そんな無知な私ですが、我孫子の温故知新と魅力を探ることを楽しみにして参りたいと思います。どうぞよろしくお願ひ致します。

記念誌の文章の中で、平林さんの『幻燈辻馬車』について書かれた一文にとても共感しました。私の故郷は会津で、高祖母の一家も自刃しております。また嘉納塾草創期には、西郷四郎他お世話役として慕われた湯浅さんの一家四人も何故か会津人です。

こうしたほんの細やかな繋がりに、「縁を感じ、この銅像を仰ぐことが出来るのは、我孫子市民として誇りに

思うと同時に、当会の皆様のお力の賜として改めて敬意を払いたいと思えます。

### 『記念誌』四十年史』を読んで

加賀屋 純一

(前略)また、私ごとですが、私は柏・我孫子に住んで延べ50年以上たちますが、ほとんど寝るためだけに帰ってくるだけでした。そのために住んでいますが、我孫子のことはほとんど知りませんでしたし、家族ほど関心も持てませんでした。現役引退後これではまずいと思ひ、自治会の役員を6年余り務めたり、長寿大学に入り我孫子を知ろうとしましたが、「えっ、我孫子ってこんなレベル？」と市勢にかえつてがっかりすることが多々ありました。それが、この年史によつて、地域、人歴史などについて思いをおさせていただきました。その点がいへんありがたい事でした。(中略)

第二章「研究論文・随想など」の寄稿文ジャンルの広さにびつくりしていて、これが「我孫子の文化を守る会」の特性なんだと改めて気づかされました。そして、この会は、過去に我孫子に関連した人や出来事、地理を深掘りし研究する有志の会と思っていました。もちろんそうだとはあらためて思いましたが、それだけではなく、現在から将来に向けて、我孫子発の文化を新たに構築していく会なんだと気が付きました。(中略)

次いで気になったのは、「我孫子を通行した人たちの足跡」です。読んでいて、我孫子に対する思い入れが強い方なんだなと思えました。同じテーマで「あびこだより76号」でも書いておられます。その熱心さには敬服しました。ただ、それがこの記載内容に賛成かと言えば、すべてではありませんが、「否」です。でもこう思つて論じる方がおられるということが、楽しいと思えました。

同じことで、「我孫子と将門伝説」論文と「あびこだより」で3度記載されていて、「将門の王城が我孫子である」との論を展開しています。これこそ我孫子に対する思い入れがすごいと思われました。

ただ、これもご本人が言っておられるように、西嶋博士(私は、偶然博士の邪馬台国関連本を持つていましたので知っていました)が、すべて否定されたとの述懐で、一般にあまり受け入れられないと思っておられるのでしょうか。私も賛同はできないかなと感じています。その結論もそうですが、その論理の展開の仕方も賛成しかねるところですが、これも「我孫子愛」が成せることなのでしょう。

ここでひとつ疑問が湧きました。この2つの論文は当然、複数の意見やら論文が存在していてもいいはずと思うのですが、ふたつのテーマはそれぞれおひとりの文章が載っているだけで、これだけ優秀な方々がおられて反対意見はないのでしょうか。それともこの論理は、会全体で統一した考えであることなのでしょう。(反対意見があると面白かったのですが)(後略)  
(本人の了解のもと一部を掲載しました。編集者)

### あびこだより 96号

### 「柳宗悦の父権悦と嘉納治五郎との

### 関わりを探る」

竹下 賢治

(元白樺文学館学芸員 ふれあい塾あびこスタッフ)  
柳宗悦の父、権悦が手賀沼を訪れたのは明治二十二年(一八八九)二月初旬、宗悦が生まれる一か月前のことでした。

それから二十二年後、今度は叔父の嘉納治五郎が沼の畔に別荘と農園を持ったのです。

柳権悦は海軍に籍をおき、日本人の手による初の海図を作成し、「日本水路測量の父」あるいは「海の伊能忠敬」と称された人です。彼はやがて「大日本水産会」の殖産事業に参画し、水産業の近代化を推し進め、遠洋漁業やトロール漁業の導入をはじめ、水産業従事者を養成するための教育施設(「水産伝習所」→「水産講習所」と改名)の設立にも貢献しました。この施設が現在の「東京海洋大学」です。

殖産事業推進の過程で訪れた手賀沼。手賀沼鴨猟

の優秀性を見出し、その調査報告書「梟雁狩猟説」(遺稿)が刊行されました。

榎悦の殖産事業は嘉納治五郎と、長男の柳悦多(宗悦の長兄)に引き継がれました。

嘉納は「国を発展させるためには殖産興業と教育の普及発達が急務である」との持論から、門下生を安房館山にあった水産講習所に入所させました。悦多もその一人でした。すなわち、実学教育(実践的な知に基づく教育)です。これは嘉納が尊敬して止まぬ勝海舟、義兄榎悦の持論でもあったのです。

当時、館山では萬里小路通房が近代農業技術の第一人者を招いて農園を経営し、近在の人たちに促成栽培や果樹栽培の指導を行っていました。こうした経営法は後に嘉納が我孫子に拓いた農園のそれとあまりに似ていました。

また、別荘「臨湖閣」では定期的に「臨湖閣茶話会」が開かれ、門人等が集い、農業や水産業の展望課題などが論議されました。

悦多は講習所卒業後、練習船の教官として後輩の指導にあたっていましたが、やがて、東海漁業会社技師長として遠洋漁業に従事するようになりました。日本初の内燃機関搭載の漁船は彼が開発したものです。柳悦の殖産事業は、悦多と嘉納が安房館山で開花させ、我孫子の嘉納後楽農園で結実させたといえます。

## (プロジェクト報告) 百人一首を楽しむ会(番外)

美崎 大洋

今月の歌(恋の歌)

(その9)

契りきなかたみに袖をしぼりつつ

末の松山浪越さじとは

(O42)

【現代語訳】

約束したのにね、お互いに泣いて涙に濡れた着物の袖を絞りながら。末の松山を波が越すことなんてあり得ないように、決して心変わりはいらないよ。

【語句】

【契りきな】契り」は4段活用動詞「契る」の連用形で、主に「(恋の)約束をする」という意味。「約束したものでしたよね」と過去を感動的に回想している。【かたみに】副詞で「お互いに」という意味。【袖をしぼりつつ】「袖をしぼる」というのは「泣き濡れる」という意味で、涙を拭いた袖がしぼらねばならないほどぐっしり濡れた、という意味合い。大げさに思えるが、平安時代の歌によく使われる表現。【末の松山】現在の宮城県多賀城市周辺。【波越さじとは】「じ」は打消しの推量・意志を表す助動詞で、「かたみ」とは「まで」が「契りきな」に続く倒置法になっている。末の松山は永遠を表す表現。

【作者】

清原元輔(きよはらのもとすけ。908～990)清原深養父(きよはらのふかやぶ)の孫で清少納言の父にあたる。熊本市の清原神社(北岡神社飛地境内)に、祭神として祀られている。平安中期に活躍した大歌人「梨壺(なつぼ)の五人の一人として有名で、五人で「万葉集」を現在のような20巻本の形に整えた訓点打ちの作業や、村上天皇の命による「後撰集」の編纂を行っている。元輔が歌人として高名だったことは「枕草子」に見え、女房勤めた折に清少納言が「父の名を辱めたくない」ので歌は詠まない」といつて許されたという逸話がある。祖父の深養父も『古今和歌集』に「一首も採用され、歌人として名高い。清原元輔は、相当頭の回転の速い、ウイットに富んだ面白い人だったようだ。平兼盛が、歌合のたびに正装をして長時間考え悩み、苦吟しているのを見て「そんな深刻に考えなくて、思いついたまま詠んでいけばいいじゃないか」と言ったというエピソードがある。さらに今昔物語では、都の大通りで落馬して冠を落とした時に、「あれは仕方なかったんだ。不可抗力だ」と言って周囲で見ていた人々に説いて回った。

【関連狂歌】

清はらの元輔といふ御名にてお歌は末の松山といふ千切れたる鴉の羽の萎れつつ末の松山浪(さざ)じとは

□友好団体関係

五団体会議

五団体(市史研究センター、及び「ガイドクラブ、ふるさと我孫子ガイドの会、我孫子の景観を育てる会、当会)会議では地元郷土資料館、若しくは郷土資料室の建設を目指し、市に対し提言、要望書の提出を進めて来た。この一年のコロナ下における同会議の活動報告会が6月26日行われた。

この期間の活動は主に市史研が中心となっており行われた。以下の概要。

1. 市議会において木下生涯学習部長が「現湖北支援学校の場所を借りて民間の古文書約22万点、250箱を保管、旧家から申し出があれば、保管場所の確保に努める」と答弁。(6月8日市議会)
  2. 柴崎川村正信家文書、我孫子市に移管される(6月18日)。同家に所蔵されていた22箱(約7380点)が市の仮収蔵施設に移管された。
  3. 5月、11月に予定されていた「市政ふれあい懇談会」が中止となったが、当日配布予定の資料に「文化交流拠点施設整備の検討」の項目があり、「令和3年度中に、関係諸団体からの意見聴取を行う」と明記されていた。
  4. 市の作成した「我孫子市文化財保存活用地域計画」についてのパブリックコメントに応募。意見をまとめて9月11日に文化・スポーツ課に提出。
  5. 令和2年12月18日「我孫子市文化財保存活用地域計画」が国の文化審議会の答申を経て文化庁長官の認定を受けた。
  6. 教育長が令和3年度の教育施策の基本方針を表明。一部明。「文化交流拠点施設の整備検討について」「文化交流拠点施設建設構想(案)」に基づき、引き続きホール規模や機能などについて関係団体などに意見を聞きながら検討していく。
- 井上家・川村家文書などを布佐南小学校の余裕教室を活用していきたい。

第二十九回短歌の会(最終採択の一首)

五月二十五日実施

地に落ちし椿の花のなほ赤く  
いまひとたびのはなやぎ哀れ

伊奈野 道子

コナ禍の自肅につかれ我わすれ  
小さな星と満月を見ぬ

佐々木 侑

窓にさす朝の陽位置替え暖かし  
何をしようと胸のふくらむ

大島 光子

沢山の付箋付きたるゲラ擦り紙  
記念誌成るも捨捨る気ならず

美崎 大洋

木漏れ日の林に集い「瑠璃色の地球」の  
歌聞く別荘跡に

村上 智雅子

新しき孫の夫婦をとり囲み  
うからと写真をとりて喜ぶ

三谷 和夫

手賀沼の岸辺に桜咲きほこり  
スキップする児の歓声たのし

飯高 美和子

うちの子と愛でいしカエル婚せしか  
雨を知らせて声あわせ鳴く

納見 美恵子

あの日から何を残すか被災地に  
虚しく過ぎたる十年の日々

芦崎 敬己

籠り居の伸びし黒髪くしけずり  
日が一昨日持て余したり

藤川 綾乃

文学掲示板

令和三年九月展示作品(文学の広場)

チンチンの熱爛にせる岩魚酒の  
湯気立つ先に君の微笑み

こっさけ

我孫子市 佐々木 侑

直後ろより風受け走る我がヨット  
向かう先よし走水なり

我孫子市 藤井 吉弥

還付金の詐欺にかかれど落着きて  
処理せし妻に頭を下げぬ

我孫子市 三谷 和夫

今日こそは心を込めて墨を磨る  
親しき友の歌を書かんと

我孫子市 飯高 美和子

大鳥居めざして登る九段坂  
「もう登れない」とある夏の母

柏市 納見 美恵子

マイカーも海外旅行も縁遠し  
庭の草むしり夏の日を過す

我孫子市 山崎 日出男

楚人冠「序跋詩歌集」より 杉村楚人冠  
俳句(昭和5年)

青梅をひんだかえたる蛙かな  
青々と名月残る蚊帳かな

打水に白靴をいたはる心

二の腕は汗にとどかぬ泥手かな  
譜をめくる指先に梅雨のしめりかな

『我孫子の文化四十年の歩み』  
追加部数の申し込み方法について

連絡方法(メールまたは電話)  
メール [mss\\_misaki@yahoo.co.jp](mailto:mss_misaki@yahoo.co.jp)

TEL 080-3410-4426  
04-7182-0861

お名前(振込者名)を明示の上、必要部数の金額を下記口座にお振込みください。

振込先  
(金融機関) ゆうちょ銀行  
(店名) ゼロゴハチ(〇五八)  
(店番) 058 (預金種目) 普通預金  
(口座番号) 4589211  
(口座名) ミサキ タイヨウ

当会の行事予定

□ 「放談くらぶ」  
日時 8月15日(日) 14時〜16時  
会場 我孫子南近隣センター(けやき8階)第1会議室  
講師 竹下 賢治氏(元白樺文学館学芸員)  
演題 「柳宗悦の父権悦と嘉納治五郎との関わりを探る」  
(6ページ)あびこだより96号(参照ください)

◎ 参加費、会員無料、非会員三〇〇円(定員35名)  
申込みTEL FAX七二八五〇六七五 佐々木まで

□ プロジェクト「短歌の会」予定  
第三十回短歌の会  
日時 7月27日(火) 13時30分  
場所 けやきプラザ10階小会議室

編集後記 『四十年史』収載の論文の一部が読売新聞の記事に採用されたことを一面で紹介したが、作者本人は勿論だが、会としても大変名誉なことだ。新聞記者は常に新しい材料を探している訳だが、その材料を提供したことになる。▲今回刊行した記念誌については、お蔭様でいくつか、お褒めの言葉を頂いている。「内部の作品構成は勿論ですが、造本もしっかりと素晴らしい。口絵も多色刷りで10頁もあり、永久保存版ですね」など ▲また「1ページから最後まで全て読んだ」と何人かからわざわざ報告も貰った。まさに作成者、編集者冥利に尽きる。(美崎)